

2019年度日本魚類学会シンポジウム

スウェーデンのVega号が採集した140年前の日本産標本群の意義—分類学的研究に基づく標本の役割を再考：過去の生物多様性復元，今日の環境保全，未来世代への記録と保存
Significance of the Swedish Vega Collection: Japanese specimens from 140 years ago — a case study reviewing the past, present and future roles of specimens for taxonomic analysis: reconstructing the biodiversity of the past, conserving the environment of today, and preserving a record for research by future generations

【趣旨】

2019年はVega号来日140年にあたる。Vega号は北東航路の航海に世界で初めて成功した後、1879年に日本に寄港した。本シンポジウムでは、2015-2017年度の科学研究費補助金で実施した「スウェーデンのVega号資料に基づく明治初期の日本研究と琵琶湖環境の復元」の研究成果を共有するものである。研究の内容は、スウェーデン国立自然史博物館にて、1879年にVega号が持ち帰った日本産標本資料の解析である。具体的には各動物群の専門家が、博物館での種の同定に基づき、①琵琶湖で収集した淡水魚類・水産無脊椎動物標本、②横浜、神戸、長崎周辺で収集した海水魚類標本と非海産貝類を中心とした無脊椎動物標本に関する標本調査、採集記録との照合を行った。特に、琵琶湖で収集した無脊椎動物標本からは、混入した藻類や水生昆虫から、当時の南湖の生態系復元に寄与する新しい知見が得られた。また海産魚では、産地初記録となる神戸で収集したアオギス標本が得られたほか、東京産のアオギス標本を含む貴重な情報を得ることができた。

シンポジウムの目的は、1) Vega号標本の共同研究の成果を報告する；2) 研究成果を1つの事例として、今後の調査や将来の研究のために標本資料の意義を再考する、の2点にある。研究成果を事例に用い、次の5点から標本の意義を再確認し、話し合う場を提供したい。①分類学に基づく生物種の変遷；②各標本群と採集地から推察される140年前の環境や生態情報の復元；③外来種侵入に関する知見；④探検航海資料の生態学・保全生態学への応用；⑤博物館の役割、長期的に標本資料を保管する意義・重要性、などである。

明治初期の横浜、神戸、琵琶湖、長崎を中心とする魚類・水産無脊椎動物標本群は、国内外でも非常に稀な標本資料である。調査の結果Vega号標本は、近代化により日本の沿岸域や琵琶湖が様々な人為的改変を受け、大きく変貌する前の1879年時点の生態系情報を復元しうる重要な学術資料であることが判明した。現地調査を行った参加者が発表・報告を行い、関心のある研究者らと情報共有し、意見交換する場としたい。

【コンピーナー】 滝川祐子（香川大学農学部）

【プログラム】

第1部：Vega号標本の共同研究の成果報告

1. 9:00－9:15 趣旨説明・Vega号標本の収集経緯の概要
滝川祐子（香川大・農）
2. 9:15－9:45 Vega号が収集した海産魚類標本が示唆する明治初期の日本の沿岸環境
瀬能 宏（神奈川県博）・吉野哲夫（美ら島財団）
3. 9:45－10:15 Vega号が収集した日本産淡水魚の概要
藤田朝彦（㈱建設環境研究所）・川瀬成吾（大阪経済法科大）・細谷和海
（近畿大名誉教授）
4. 10:15－10:45 琵琶湖産淡水魚の分類研究におけるVega号標本の位置づけ
川瀬成吾（大阪経済法科大）・藤田朝彦（㈱建設環境研究所）・細谷和海
（近畿大名誉教授）
5. 11:00－11:30 琵琶湖の無脊椎動物相の変遷からみたVega号標本の位置づけ
西野麻知子（元びわこ成蹊スポーツ大）
6. 11:30－12:00 貝類標本が示すVega号の日本での足跡および混在資料の重要性
中井克樹（琵琶湖博物館）
7. 12:00－12:15 Vega号標本に含まれる魚類以外の脊椎動物，地衣類，その他の生物
滝川祐子（香川大・農）

第2部：Vega号標本を事例とした総合討論

8. 12:15－13:00 総合討論 テーマ
 - ①分類学に基づく生物種の変遷
 - ②各標本群と採集地から推察される140年前の環境や生態情報の復元
 - ③外来種の侵入に関する知見
 - ④探検航海資料の生態学・保全生態学への応用
 - ⑤博物館の役割，長期的に標本資料を保管する意義・重要性などを想定